
孤独の人魚姫

K 氏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤独の人魚姫

【Nコード】

N1985Y

【作者名】

K氏

【あらすじ】

人魚の国の第八王女サーシアは、海上で偶然助けた王子に一目ぼれして、王子に会いたいがために魔女と取引する。「意思を伝える手段を持たずに見事王子のハートを射止めてごらん。そうしたらおまえは完全な人間になれるし、二本の足と引き換えにもらった声も返してやるよ」そうして向かった陸の世界。運よく王子に拾われて、何とすぐさま結婚を申し込まれる。簡単に事が運び有頂天になるサーシア。けれど、結婚式の翌日になっても声は戻らなくて――。

アンデルセン童話の「人魚姫」をベースにK氏が書かれたあらすじを、私いちおが預かり小説に仕立てました。そのため作者名は「K氏」といたします。上記のあらすじを更新が消化するのはしばらく先になります。

1、成人の儀式（前書き）

「人魚姫」をベースにしているため、溺れるシーンがあります。王子が一人不注意で船から落ちるだけでほとんど描写もできませんでしたが、ご注意ください。該当のシーンが含まれるのは二話と三話です。

主人公が16歳という年齢の割に幼いです。ですが話が進むにつれて大人になっていく予定です。

1、成人の儀式

プリンズランド——陸にほど近い位置に広大な領土を構える人魚の国。

数ある人魚の国の中でもっとも栄えているといわれているこの国では、この日、国をあげてのお祭りが催されていた。

プリンズランド王の末の娘、第八王女サーシアの16歳の誕生日だからだ。

16歳といえば、人魚の国では成人する歳にあたる。

だが、この日サーシアは子どものようにふくれつつらをしていた。

「つまんなーい！ わたしのためのお祝いなのに、遊べないなんて！」

駄々をこね、椅子に座ってピンク色の尾ひれで床を叩くサーシアを、世話係のリリアが苦笑してなだめた。

「サーシア様のお祝いだからこそです。サーシア様が式典や催し物に出席してくださらないければ、お祝いは始まりませんわ」

リリアは、サーシアの艶やかで豊かに波打つ、ストロベリーブロンドを丁寧にくしけずる。

「父さまの誕生日の時は、お忍びで遊びに出れたのにい」

サーシアは目の前の鏡越しに、茶色の癖っ毛を頭の後ろできっちりまとめたリリアに口をとがらせる。リリアは小さくため息をついた。

「サーシア様は今日で大人になられるのですから、あまりわがままをおっしゃってはいけませんわ」

「うー……」

小さく唸り声を上げて、サーシアは黙り込む。

サーシアにとって、四歳年上のリリアは一番身近な存在だった。

末っ子で、小さい頃に母親を亡くしたため母の側仕えをしていたリ

リアの母親に育てられたが、かわいそうかわいそうと言って甘やかす母親に代わって、サーシアのわがママをたしなめてくれるのがリアだった。また、“ここまでならいいだろう”と判断したわがまには付き合ってくれた。誰よりも側にいて身の周りの世話をしてくれるリアのことをサーシアは信頼していて、リアが頑として許してくれないことは、しぶしぶながらも言うことを聞くようにしている。

ぶすくれていると、後ろのほうから声をかけられた。

「おやおや。お姫様はご機嫌斜めかい？」

「あ、セラ様……」

サーシアより先に、リアが声をかける。

セラはこの国の有力貴族の息子で、サーシアより六つ年上で幼馴染の間柄だった。サーシアの世話係や父王や兄姉以外でただ一人、ここ、サーシアの私室に入ることを許されている。

青みがかった銀髪を水流になびかせながら、青色の尾びれを緩く動かして移動し、リアの横に並んでサーシアを鏡越しにのぞき込んだ。

「せっかくの誕生日にそんなぶすくれた顔をしていたら、しあわせが逃げてしまうよ？」

サーシアは顔を赤くし、それからぷうつと頬をふくらませる。

「ぶすくれた顔なんてしてないもん！」

「ははっ、そうやって怒ってる顔がぶすくれてるっていうんだよ。

国中のみんながお祝いしてくれてるんだから、今日くらいわがママ言わずにずっと笑顔でいたら？」

「わがままなんか——」

「言ってたんだろ？ サーシアがぶすくれた顔をしてる時は、たいいていリアにわがママを止められた時だ」

セラに笑顔で図星をさされて、サーシアはまたうなって黙り込むしかなくなる。

「そうそう。サーシア、君を呼びに来たんだった」

「え？ まだ“成人の儀式”が始まる時間じゃないでしょ？」

成人を迎える16歳の誕生日には、“成人の儀式”と呼ばれる儀式が行われる。それは人魚を一目でも見ようものならやつきになつて狩り出そうとする危険なニンゲンを見に行く儀式で、人魚は大人になると海の上に出てもいいことになるので、十六歳の誕生日を迎えると必ず大人と一緒に一度は見に行かなくてはならないことになっている。そうして危険な場所を教えられ、という時に見つけられてしまつかをしつかり頭に叩き込まれて、ようやく一人で海の上に行くことを許され、大人になったと認められるようになる。

海の上の世界には興味があるけど、サーシアはいろんなことを覚えなくてはならないその儀式には、始まる前からうんざりしていた。サーシアのどんよりした気分を察して、セラは苦笑する。

“成人の儀式”の前に王様が大事な話をしたいとおっしゃってるんだ」

それを聞いて、サーシアは眉間にしわを寄せた。

「えー？ それってお説教？」

「サーシアは何かお説教をされるようなことでもしたのかい？」

「してないけど……儀式のことで何かくどくど言われそう……」

サーシアは頭を抱える。

だから気付かなかつた。サーシアの後ろで、セラとリリアが鏡越しに悲しげにほほえみ合っていたことに。

気が進まないまま、サーシアはセラに連れられて父王の私室に向かった。

父王はプリンズランドを長きに渡って平和的繁栄に導いてきたことから、国中の民から信頼され慕われている偉大な王だ。政を^{まづりごと}行う時は威厳を持って厳しい処断も下すことのあるこの王も、年がいつてから授かった末の王女にはめつぽう甘く、かなりの心配性になる。忙しいためめつたに会えないせい、会えば必ずと言っていいほど

心配だ心配だという話になる。

今回の呼び出しも、成人の儀式のことで心配になったからだろう。無茶をするな、ちゃんと教えに従えと口酸っぱく言うに違いない。

そう思っただけで父王の前まで泳いでいったサーシアは、思わぬことを言われて目を丸くした。

「え？ 結婚——？」

「そうだ。おまえも今日で大人になったことだし、成人の儀式の前に行われる宴の席で、セラとの婚約を発表しようと思う。結婚式は一カ月後だ」

「ちょ、ちよつと待って！ まだ結婚してない兄さまや姉さまもいるのに何で！？」

焦るサーシアに、父王は白髪の間じるようになった長いあごひげをなでつけながら、重々しく答えた。

「おまえは16歳にもなったのに、危なっかしくていかん。結婚をしてセラの妻としての責任を果たすようになれば、少しは落ち着けるようになるだろう」

「そんな……！」

父王の横暴に、サーシアは愕然とする。

サーシアには夢があった。

16歳になったら社交界に出られるようになる。そうしたら素敵な人と知り合っで、とびっきりの恋をしよう。

でも、結婚したら恋なんかできなくなる。

セラが結婚相手？

考えられない。セラは小さい頃からリリアと三人で遊んできた幼馴染で、兄のように慕っているけど恋愛対象にはならない。

それはきつと、セラも同じはず。

一緒に反対して……！

すがるような思いで振り返ると、セラはあきらめたような笑みを

浮かべて肩をすくめた。

「まあ、あきらめることだね。——王様には誰も逆らえない」

それだけのことだったけど、わかってしまった。セラはサーシアのことを愛してるわけじゃないのに、王に命令されたから仕方なく結婚することにしたのだ。

怒りがふつふつと込み上げてきた。結婚を強要する父王にも、仕方なくそれに従うセラにも。

サーシアは父王に向きなおり、鈴を鳴らすような愛らしい声を大にして怒鳴った。

「絶っつ対、嫌！！！」

そして王の私室を飛び出していく。

「サーシア！」

「放っておけ」

サーシアを追いかけようとしたセラを、王は声をかけて止めた。

「そのうちにわかる。セラ、小さい頃から親しかったおまえと結婚することが、一番幸せなのだと」

セラは困ったような顔をして遠慮がちに言った。

「そうかもしれませんが、今放っておいたら危ないような気がします。サーシアは嫌なことを強要されて、それを黙って受け入れるような子じゃありません。下手をすると誕生日のお祝いのために厳重な警戒下にあるこの城から抜け出して、成人の儀式もすっぽかすかもしれませんよ？」

「あ……」

その可能性に気付かされ、普段厳めしい顔をすることで威厳を保っている王は、ぽかんと口を開け間抜け顔になる。

そうして、城内外をひっくり返すほどの大搜索が始まった。

その頃サーシアは、セラが心配した通り城を抜け出していた。小

柄なサーシアなら通れる抜け道があつて、誰にも知られていないために、嚴重な警備もやすやすとかいくぐつてしまったのだ。

絶対結婚なんかしないっ！

成人の儀式もすっぱかすつもりで、サーシアはまっすぐ上を目指して泳いでいた。海底に沿って泳いでいると、夜通し行われるお祝いの光に照らされて、すぐに見つかつてしまふ。そのため上に向かうしかなかった。

怒りに任せて泳ぎ続けたため、うっかり海の上に顔を出してしまふ。

儀式もまだ済ませてないのにと怖くなつたが、サーシアは怒りを思い出して怖さを振り払つた。

父さまがいつまでもわたしを子ども扱いするからいけないのよ！心配されなくつたつて、自分のことは自分でちゃんとできる。

一人で海の上に出たからつて、ほら、怖いことなんか何にもない。初めて見る海の上の世界は、サーシアが知らなかつた輝きに満ちていた。空に浮かぶのは、大きくてまあるい光。水面が揺れてきらきらと光を反射し、海の底よりはるか遠くまで見渡せる。

陸地の、高い崖の上にそびえ立つ城。サーシアを挟んで反対側には、海の上に大きな何かが浮かんでいる。そこから陽気な音楽が聞こえてきて、サーシアは興味を引かれて、そちらに向かつて泳ぎ始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1985y/>

孤独の人魚姫

2011年11月4日07時08分発行